

主に指導する教科・領域 算 数

実 態	目 標	
5までの数量は理解できていることが分かるが、10までの数量が理解できているかどうかは分からない。1位数の足し算はできたものもあったが、理解した上での解答かどうかを確認できない。筆圧が弱く、数字を書くことはできるが、形が整わないことが多い。	長 期	暗算で1位数の和を求めることができる。
	短 期	具体物の操作を通して繰り上がりのある1位数の和を求めることができる。
	手 だ て ・学習意欲を高めるために、具体物として、本人の関心の高い昆虫の絵カードを活用する。 ・繰り上がりのときに5のまとまり二つを作り、10のまとまりとして絵カードの虫かごに入れる。	

< 実 践 事 例 > 単元「あおむし足し算をしよう」(児童G)

<あおむしカードを数えてみよう>

- ① Gに足し算の数式を見せて、問題を解くように伝えた。Gは、数式を少し見たが、すぐに「嫌だ」といって顔を伏せてしまった。
- ② あおむしの絵カードをGに見せた。Gは、あおむしの絵カードを見て、「だれの?」「どうしてあるの?」「何するの?」と繰り返し教師に尋ねた。Gのあおむしカードへの関心と期待が高まったことを感じた。
- ③ Gに何枚かのあおむしカードを見せて「幾つあるか数えてごらん」と問うと、Gは一生懸命に数えだした。カードは、ランダムに置かれていたが、Gは幾つかの問いに対して、ほぼ正しく数えることができた。

<あおむし足し算をしよう>

- ④ Gが、10枚までのあおむしカードを数えることができ、また、指示された数と同じ数だけのあおむしカードを取ることができた。このことを受けて、あおむしカードを操作しながら1位数の足し算の学習を行った。あおむしカードのほかに、あおむしカードを置く場として、キャベツカードを準備した。キャベツカードの1枚は赤い縁取りがしてあり、もう1枚は緑色の縁取りをした。



<あおむしカードをキャベツカードに置いたところ>

- ⑤ 繰り上がりのない足し算に取り組んだ。例えば、「 $6 + 2$ 」の数式を提示すると、Gはあおむしカードを6枚取り、6の上に置かれた1枚の大きな赤いキャベツカードの上に置いた。次に2に目を移し、あおむしカードを2枚取り、2の上に置かれた緑色のキャベツカードの上に置いた。教師の「全部で幾つ(合わせて

幾つ)」の声を聞いて、Gは、5列2行の枠に全部のあおむしカードを並べて置いて、その合計を答えの欄に書いた。筆圧は弱いながらも自分から答えを書こうとしたことは、意欲が高まったという点で意味が大きい。

<繰り上がりのある足し算をしよう>

⑥ 繰り上がりのない足し算は、毎回正しく解答をすることができた。解答への手順も覚え、途中の支援がなくても、独りで進めることもできるようになった。そのため、繰り上がりのある足し算の問題へ進んだ。位の理解を図るためにも、10のまとまりをつくらうと考え、厚紙で虫かごに見立てた箱を作った。「7+8」の問題では、あおむしカードを7枚、赤のキャベツカードに置き、次にあおむしカードを8枚、緑色のキャベツカードに置いた。「全部で幾つ」の言葉掛けに合わせて、枠にカードを並べていった。10枚並べて、枠がいっぱいになったところで、「いっぱいになったから、虫かごに入れてね」と言葉を掛けると、Gが10枚のカードを虫かごへ入れた。そして、残りのあおむしカード5枚を、また枠に並べた。Gは、虫かご（かごには大きく「10」と書いてある）の10と並べた5を見て、「15」と答えることができた。Gは、10以上の数もある程度認知していたようであった。

評 価	今後の課題
あおむしカードを使ったことで、Gの課題に取り組む意欲を高め、足し算の支援ができただけでなく、Gが実際どの程度の数量を理解していたかも推し量ることができた。関心がなく、表出されていない力や理解があるので、自主的、意欲的な活動を引き出すことができる課題や教具を準備することが重要である。学習課題をスムーズに理解していったことは、Gが教師の想定以上に数量の理解をしていたからであろう。	10のまとまりをつくる課題に取り組み、十の位の概念がイメージできるようにしていきたい。そのためには、このまま足し算の課題を発展させていくことが望ましい。さらに、2位数の量を理解して合成、分解の操作ができるように進めたい。